

出アルハキ日蘇開戦ニ際シ日本軍主力ノ滿洲ニ於ケル集中  
掩護ニ任ズル作戰任務ヲ附與セラル所要ノ準備ヲシテ居  
リマシタ。勿論コノ對蘇作戰準備ハ北滿方面ニ進出シメサ蘇  
聯軍ガ更ニ南滿地區ニ攻撃シ來ル際漸ク南滿北側地帯  
ヲ斃手破スル程度ノ防衛的ヲモリテアリマス。從テ支那軍ニ  
對シテハ本來我作戰準備ノ對象トシテハ居ラズカツクノテアリ  
マスガ前ニ申シマシメ様ニ東北ノ情勢ガ悪化シ殊ニ其ノ軍隊  
ガ抗日意識ニ燃エテ逐次日支西軍ノ間ニ衝突ノ危険ヲ包  
藏スルニ至ツテ參リマシメノテ當時數年前ヨリ陸軍中央統  
帥部ヨリノ命令指示ニ基キ武力ヲ以テ其ノ任務ヲ達成スヘ  
ク力ニ處スル應變ノ作戰ヲ準備セラレタ次第デアリマス。  
即チ裝備編成劣弱十約一萬餘ノ關東軍ハ長春以南。



1000 料ニ近キ南滿線ニ平時態勢ノ儘令散配置セラレニ。  
數萬ヲ算スル支那軍ノ包圍下ニ在リ殊ニ奉天長春昌圖鳳  
凰城等ニハ數千乃至數カノ大兵ガ駐屯シ奉天大王以折口旅  
ノ各兵室ニハ對日強行決意ヲ示セル旅長ノ訓示ガ印刷  
セラレテ敵意ヲ昂進サセテイルト云フ様ナ戰態ニ於テ軍  
ハ方一日支衝突ニ際シ軍主カノ發動ヲ要スル時ハ其ノ  
衝突地点ノ何レタルト問ハズ機先ヲ制シ殆ト關東軍  
ヲ全カク擧テ奉天附近ニ集中シ一與手ニ在奉天軍中樞  
並東北軍ノ精銳ニ一撃ヲ加ヘ彼ノ死命ヲ制シ至短期間  
ニ解決スルノ作戰方針ヲ確立シ之ニ基テ教育訓練輸  
送等諸般ノ準備ヲ整ヘタ次第ヲアリマス。其時ハ  
過少ノ兵カヲ以テ衆敵ニ對シ此困難ナル任務ヲ達成スル為



ニハ極メテ周到ナル計畫準備軍ノ團結鞏化並訓練ノ精到ト  
ヲ必要トシマシタ特ニ各部隊ニハ軍紀ヲ至嚴ナラシメ鐵石ノ團  
結ヲ保持シテ教育訓練ヲ重点主義ニ徹シ安貞戰ニ則スル如ク要  
求セラレタ次第デアリマス本庄軍司令官ガ昭和六年八月菱  
刈大將ニ代ツテ著任セラレ、ヤ當時殊ニ中村大尉事件、万  
寶山事件等ノ累發、各地守備勤務ニ關スル衝突事件、  
瀕發等ニ鑑ミ事態ノ急迫ヲ察知セラレ一方ニ於テハ將  
兵ヲ嚴ニ戒メテ隱忍自重輕舉妄動ヲ禁ズルト共ニ他方  
ニ於テハ服務ニ當リ一旦衝突シタルトキハ特ニ小部隊ハ積極  
果敢短切ナル行動ヲ以テ其ノ任務ヲ解決ニ邁進シ彼ヲ以テ  
輕兵ト侮リ徒ラニ事態ヲ擴大セシメザルコトヲ訓示セラレ又着  
任後ノ初度巡視ニ際シテハ隨時檢閲ヲ併セ行ヒ特ニ各隊ノ



作戰準備の完遂ヲ点檢セラレタリ又裝備ニ於テ其ノ兵數ニ  
於テ劣弱ニシテ然モ陸軍中央當局ヨリ何等ノ增強ヲモ期待  
出来ヌ状態ニ鑑ミ關東軍トシテハ滿洲ニ所在スル利用可能  
ノ範圍ニ於ケル作戰資材ノ活用ニヨリ戰力ノ增強ニ努メタリ  
例ヘバ或ハ奉天獨立守備第二大隊ノ兵舎ニ重砲二門ヲ備ヘ  
付ケルトカ或ハ歩兵部隊ノ一部ニ裝甲自動車若干ヲ裝備ス  
ルトカ爆藥裝備其他城壁攻撃資材ヲ用意スル等戰鬥  
威力ノ欠陥ヲ補フ努力ヲシタ次第アリマス併シ乍ラ廣域又ハ  
長期ノ作戰遂行ノ能力ハ關東軍トシテハ何等之ヲ有シナ  
カツタ次第デアリマス軍隊輸送用ノ如キモ遼陽部隊ノ奉天  
ニ向テ列車輸送ハ警報受領後約一時間<sup>間</sup>ニ開始セラルハ自  
ラ持ツテ居リマシタガ事變當時ハ遺骸作ラ約四時間ヲ



要シマシタ又敵裝備ハ優良就中迫撃砲ノ強大戰車ノ飛行機  
等ノ保持ニ鑑ミ我方トシテハ得意ノ夜戰ノ訓練ヲ熾烈ナラシメ  
又城壁攻撃手ノ演習ヲ重ナル等一以テ百ニ當ルノ概ヲ以テ應變  
ニ違算ナキヲ期シタ次第ニアリマス

第三、關東軍作戰準備ト部外者トノ關係ニ就テハ如ク  
滿洲事變當時ニ於ケル關東軍司令官ハ前申シタ如ク  
菱刈大將ノ後ヲ受ケテ昭和六年八月著任シタ本庄繁中  
將ニアツテ參謀長ハ三宅光治少將高級參謀ハ張作霖爆  
一死後更迭セシメラレタル河本大佐ノ後任トシテ板垣征四郎大佐  
作戰主任ハ自分テ其ハ他少佐大尉等若干ノ幕僚ガ居リ又  
奉天特務機關長ハ昭和六年八月鈴木美通少將ニ代ツタ  
肥原賢二大佐ニアリマス張學良ハ軍事顧問ハ柴山兼四



郎少佐テ其<sub>レ</sub>他若干ノ軍事教官ガ東北陸軍ニ招聘セラレテ  
 居リマシタ<sub>リ</sub>又第二師團長ハ多門二郎中將獨立守備隊司令  
 官ハ森連中將デアリマス之等ノ將校ハ所謂三月事件トハ何  
 等ノ關係ナク櫻會等ノメンバーテモナク又自分ハ滿洲事變  
 迄橋本欣五郎大佐並大川周明博士トハ別ニ懇談シタコトハ  
 一回モアリマセン殊ニ張作霖爆死事件後日本内地ニ於テハ  
 關東軍ニ對スル非難モ相當アツタ人デ前軍司令官荻原大  
 將前々司令官畑英太郎大將等總テ關東軍首腦部ハ特  
 ニ在滿軍隊ノ行動ニ嚴戒ヲ發シテ自重ヲ要望シ就中板  
 垣征四郎大佐ハ高級參謀トシテ軍司令部ノ首席僚勤務ヲ  
 完全ニ統制シテ居リ不軌ヲ圖ルガ如キ徒輩ノナイコトハ確信  
 ヲ有シテ居リマシタ併シ支那側ノ排日狀態就中其ノ軍隊ノ



對日抗戰意識昂揚竝其不遲ナル行動ヲ見且又日支各種  
交渉が我が協調外交ニモ拘ラズ悉ク成功セズ日支ノ國論尖  
銳化シツツアル状態ヲ見彼此武力衝突ハ最早必至ノ情勢  
ニアリトノ感想ハ軍司令官以下全幕僚各部隊長始メ全  
將兵ノ悉クが考ヘテ居ツタ所デアリマス從テ關東軍トシテハ  
方一衝突ニ際シテハ軍獨自ノ作戰準備又其ノ作戰ニ伴フ治  
安維持ノ方策等ニ關シテハ實ニ眞劍ナル研究ヲ續ク我々  
旅順ニ於ケル軍司令部ノ幕僚ハ日曜日一日ト雖モ私事ト爲  
ニ休シタ參謀將校ハ一人モナカツタ次第デアリマス又各部隊ハ  
懸命ノ努カカラシテ不眠不休訓練ノ向上ト守備勤務ノ完遂  
ニ精進シタ次第デアリマス  
滿洲事變後所謂十月事件トシテ知ラレル事件ニ際シテ前モ東



京の方には關東軍ヲ獨立スルトカ又ハ關東軍ト相呼應シテ  
何カ事ヲ起スト云フ様ナ疑惑ヲ持ツタ向モアツテ可成リ激越  
ナル電報ガ來タリ又論旨ノ為白川大將等ガ來滿セラレタ  
トモアリマシタガ現地軍トシテハ誠ニ冷靜テ只管任務達成ニ  
努カヲ續ケ寧ロ中央ハ狼狽振リニ噴飯笑止ヲ禁ジ得ナカ  
ツ次第デアリマス又當時滿鐵其他民間ニハ色々々々滿洲  
問題ニ關スル意見ヲ有ツテ居ツタモノガアツタ様デアリマスガ  
自分ヲ始メ關東軍將兵ガ之等ノモハト事變ヲ引起スガ如  
キ計畫ヲ謀識シタコトハ毫末モアリマセンテシテ是ガ如  
第四九一八事件突發ト關東軍司令官ノ決心部署  
交際ニ就テハ  
機  
昭和六年(一九三一年)九月十八日亦在將軍ハ初度巡視ヲ兼



ネタル隨時檢閲ノ最後ヲ遼陽デ終ツテ第二師團ニ訓示ヲ與  
ヘマシタスルト旅順ニ居タ三宅參謀長カラ本庄司令官宛ニ  
東京カラ建川少將カ奉天ニ來ルトハコト故板垣參謀カ  
石原參謀（私ノコト）ヲ奉天ニ殘ス様ニトノ電報ガ來マシ  
タ其處デ本庄司令官ハ板垣參謀ヲ奉天ニ行ク様ニ命  
ジ其ノ夜私其ノ他ノ幕僚ノ大部ヲ從ヘテ旅順ニ歸リマ  
シタ此夜半自介ハ中野參謀カラ大至急參謀長ノ官舎  
ニ來テクハコトデ軍司令部カラ程遠カラ又參謀長官  
舎ニ馳ケツケマシタ其處ニハ既ニ軍幕僚片倉大尉ノ手  
配デ竹下中佐以下各幕僚ガ和服ノ儘參集シテ居リマシタ  
其ノ際十八日夜一時過奉天北大營西側ニ於テ暴戾ナル  
支那軍隊ハ滿鐵線ヲ破壊守備兵ヲ襲ヒ我カ守備隊ト



衝突セリトノ報告ニ接シ奉天獨立守備歩兵第二大隊ハ現地  
 ニ向ツテ出動中ナリト第一報トシテノ軍機電報ヲ承知シ  
 シ三宅參謀長ヨリ軍司令官官邸ニ電話ヲ以テ連絡シテ  
 軍司令官ノ司令部ニ出頭ヲホムルト共ニ自合達ハ打揃ツ  
 テ其儘軍司令部ニ参リマシタテ善後策ニ關シ研究シ  
 マシタ

零時ニ八分頃奉天特務機關ヨリ北大營ノ敵ハ滿鐵線ヲ  
 爆破其ノ兵力三四中隊ニシテ虎石台中隊ハ十一時過キ五六  
 百ノ敵ト交戦中北大營ノ一角占領敵ハ機關銃歩兵砲ヲ  
 増加シツ、アリ中隊ハ目下苦戦中野田中尉ハ重傷セリ  
 トノ第二報ヲ接受シマシタ其處ニ軍司令官ガ登廳セラ  
 レマシタ



初テ軍參謀長以下ノ研究デハ支那軍ノ暴舉ニ基キ事態ガ  
此處ニ到ツタ以上ハ不幸ニシテ予期セル最悪ノ事態ガ到來シタ  
最悪<sup>早</sup>隱忍自重モ極言ニ達シタ此際断乎トシテ機先ヲ制シ  
テ敵ヲ膺懲シナケレバ今夜如何ニ悪化スルカモ余カラナイ現下  
彼我逼迫シタ状態ハ最早一刻ヲ猶豫スベカラズ断乎トシテ  
軍全カノ行動ヲ起シ短切ニ敵中樞ノ死命ヲ制スベキデアル  
トノ結論ニ達シマレタノデ自今ハ作戰主任トシテ本庄將軍  
ニ意見ヲ開陳シマシタ本庄司令官ハ瞑目セラレテ沈思黙  
想約五分間開眼セラレマスルト一般ノ形勢ヲ判断セラレ眞  
イ本職ノ責任ニ於テヤロウト確乎タル決意ヲ以テ断案ヲ下  
サレタ幕僚一同肅然感慨ニ打シレタ次第デアリマス而シテ  
此壯重干鈞ノ重ミアル決断ノ下自今等ハ實ニ油然トシテ責



任ノ重大ヲ感セラレマシタ、更ニ本庄得軍ハ平素ノ作戰計畫ニ  
拘ラズ在長春部隊ハ奉天集中ヲ止メテ其ノ儘長春ヲカ  
面ニ位置セシメ待機シテ万一ヲ慮リ寬城子、南嶺ノ敵ニ  
對處シ若クハ吉林方面ヨリスル敵ノ反抗ニ對セシメラレマシ  
タ、又奉天附近ノ戰況ニ鑑ミ軍主力ヲ先ツ奉天附近ニ集  
中スル案ヲ執ラス、兵力ノ逐次加入ニヨリ攻撃ヲ断行スル  
コトニ部署セラレマシタ、此ノ軍司令官ノ決断及部署ノ  
大細指示ニ基キ平素ノ作戰計畫ニ変更ヲ加ヘ十九日午  
前一時半乃至二時ノ間ニ左記諸命令ヲ發セラレマシタ、即  
チ在遼陽第二師團長ニハ奉天附近ノ攻撃ヲ、在公主嶺  
獨立守備隊司令官ニハ獨立守備第一、第五大隊ヲ以テ奉  
天附近ニ集中ヲ、大石橋獨立守備第三大隊長ニハ營口ノ



敵、驅逐ヲ、連山關獨立守備第四大隊長ニハ鳳凰城、安東附近ノ  
敵、掃蕩ヲ、鞍山獨立守備第六大隊長ニハ約ニ中隊ヲ以テ奉天  
ニ至リ第二師團長ノ區處下ニ入ルヘキコトヲ、又在長春步兵第三  
旅團長ニハ步兵第四聯隊及騎兵第二聯隊ヲ以テ長春ノ警備  
備ヲ夫々電報デ命セラレマシタ、尚在旅順步兵第三聯隊  
隊及旅順重砲兵大隊ニハ出動命令ヲ下達シマシタ、  
本在軍司令官ハ三宅參謀長及參謀各部長全部ヲ  
一時旅順ニ殘置シ自今以下幕僚ノ大部ヲ隨ヘ十九日午  
前三時<sup>過</sup>旅順ヲ發シ奉天ニ向ツテ進發セラレマシタ、途中沿  
線官民、支那軍脅懾ノ絶叫スル聲望ヲ浴ビ、又刻々  
推移スル戰局ノ報告ヲ接受シツ、十九日正午頃奉天傳車  
場ニ到着ヲシテ不取敢臨時ニ戰鬪司令部ヲ奉天傳



軍場ニ開設シマシタ。尚此間軍司令官ハ陸軍中央部ニ報告  
シマスト共ニ朝鮮軍司令官ニ豫テノ作戰協定ニ基キ兵力  
(混成一旅團)ノ増援ヲ要求シマシタ。又第二遣外艦隊ノ艦  
船一部ノ營口出動ヲ要請シマシタ。又第一遣外艦隊ノ艦  
之ヨリ前九月十八日日本庄將軍ハ遼陽ニ於テ建川將軍ガ連  
絡ノ為ニ奉天經由テ來ルト云フコトヲ承知セラレ之下連絡ノ  
為竝ニ中村事件ニ關スル奉天陸軍特務機關及總領  
事館側トノ連絡ヲ兼ネテ檢閲終了後同日午後板垣  
大佐ヲ遼陽カラ奉天ニ派遣シマシタ。板垣大佐ハ偶ニ同夕  
晚ク來奉シタ。建川少將ト會見シタ後詳ク其連絡用務  
モ聞カズニ更ニ會見ヲ翌日ニ約シテ別シマシタ。又其ノ夜半  
事件ニ遭遇シテ茲テ奉天現地ニ於ケル戰局ニ關シ所要



ノ指導ヲシマシタ。板垣大佐ハ高級參謀トシテ既ニ平素ヨリ  
本庄軍司令官ノ意圖ヲ承知シテ居リマシタガ殊ニ直前ニ  
於テ作戰準備ニ關スル檢閲等デ一層クニ處スル軍司令  
官ノ企圖ガ闡明セラレテ居ツタ矢先デアリマス。此突発  
セル事件ニ際シ執ツタ機宜ノ行動ハ悉ク軍司令官ノ意圖  
ニ合シ之ヲ承認セラレタ次第デアリマス。軍作戰遂行上ニ  
モ重大ナ貢獻ヲシタノデアリマス。尙九月十九日ノ午後六時  
頃參謀總長カラハ次ノ趣旨ノ電報ヲ受領シマシタ  
(一) 九月十八日夜以後ニ於ケル關東軍司令官ノ決心及處  
置ハ機宜ニ適シタルモノニシテ日本軍隊ノ威重ヲ加ヘタル  
モノト信シアリ

(二) 事件發生以來支那側ノ態度ニ鑑ミ事件ノ處理ニ關



(三) シテハ必要度ヲ超エザルコトニ閣議ノ決定モアリ、從ツテ今  
後軍ノ行動ハ此趣旨ニ依リ善處セララルベシ

第五、事件不擴大方針ニ基ク中央部ノ處理方針策ト

(四) 關東軍ノ軍事行動トノ關係ニ就テ

奉天事變突發ニ伴フテ日本政府ハ九月十九日事態不  
擴大ノ方針ヲ決定シテ其ノ日午後六時頃前述參謀總  
長ノ電報ト相前後シテ陸軍大臣カラ軍司令官宛、今回  
ノ日支兵衝突事件ニ關シテ帝國政府ハ支那兵ガ端鉄線  
路ヲ破壊スルニ基因スルモノニシテ非ハ固ヨリ彼ニ存スルモ  
事態ヲ擴大セザル様ニ極力努ムルコトニ方針ヲ確定セリ  
右御含シメ上行動ヲ圖タシトハ趣旨ノ電報ヲ接受シマシメ  
關東軍トシテハ此ノ大臣ノ電報並ニ前述ノ電報ニ依ツテ

總長



政府並ニ中央統帥部ノ意思圖方針ハヨク承知ヲ致シマシ  
タ。即チ其ノ要望スル不擴大ハ方針ハヨク承知シテアル所  
デアリマシタガ現地ニ於ケル武力衝突發生トイフ客觀的  
事態ハ結果ニ於テ不擴大方針ト喰違ヒ屢々中央ヨリ  
御叱リヲ蒙リマシタ。其ノ主因ヲ考ヘマスルト先ツ現地ニ於  
ケル事態ガ常ニ中央ニ對シテ精確ニ捕捉セラルナカシタコ  
トデアリマス。我々關東軍トシマシテモ中央ノ方針ヲ体シ  
テ行動シ其ノ奴力カラ續ケタノデアリマスガ何分兵力不足  
ノ原因ス各方面ノ空隙ハ關東軍トシテハ極メニ敏感ニ作  
用シマシテ蠢動策應スル支那軍ニ對シ寸刻モ與ヘズ機  
先之ヲ處理スルコトが必要デアリマシタ。然ルニ中央ニ於テハ  
現地軍ノ此ノ戰場心理ノ理解、現地支那軍ノ動向ガ分ラ



不希望的觀測若シクハ外交交渉ノ都合等カラノ考慮  
ニテ處理セラレマシタハ必要ニテハ中央ニ於テハ  
次ニ我ガ中央當局ガ外交交渉ノ相手方タル南京政府ト  
シテハ東北ニ對シテ大ナル統制力ガナク、口約ハ悉ク實行セラ  
レマセン、又張學良モ混亂セル各地軍隊ノ行動ヲ抑制スルコ  
トガ出來ナカッタノデアリマス、我中央若クハ南京、北京ニ於テ  
ハ交渉ノ時機ニ合ハズ從ツテ事態ヲ現地局地的ニ解  
決スル以外ニ方途ガナクナリマシタ

九月下旬關東軍ハ兵力ヲ滿鐵沿線ニ集結シ情勢ヲ靜觀  
シマシタガ錦州、龍江何レモ大兵ヲ擁シテ反抗ノ舉手ニ出デシ  
トスルノ氣配ガアリマシタ、昭和六年十月末嫩江橋梁被壞セ  
ラルルヤ我ガハルビン總領事ヲ通シテ東支鐵道理事



會ニ又在「チチハル」領事ヲ通ジテ馬占山ニ交渉シテ其ノ了「解」ノ  
下ニ嫩江附近ノ橋梁ノ修理ヲ始メマシタ所其ノ修理班ニ對シ  
テ現地支那軍ハ不法射撃ヲ開始シ我掩護部隊ハ已ム  
ナク應戰シ苦戰ニ陥リマシタ、爾後次ノ交渉ニモ拘ラス遂ニ  
應ゼズ中央部又之ノ事態ヲ認メ之ヲ擊破スルノ方途ヲ執  
リ馬占山軍邀撃トナリマシタ、又關東軍主力ガ遂ニ「チチハ  
ル」方面ニ進出ヲ餘儀ナクセラルルヤ、奉天附近ニハ僅カニ  
歩兵ニ中隊ヲ止メ得タニ過ギマセン、我輕兵ヲ察知シ支那  
軍ハ錦州方面ニ大軍ヲ擁シ殊ニ當時支那本土方面カラハ  
盛ニ抗日宣傳ヲ行ヒ此ノ敵兵力ノ增加出動ハ南滿地區  
ノ重大ナル脅威デアリ、關東軍トシテハ極メテ軍ノ神經ヲ  
刺戟シ錦州方面ノ策源ヲ掃蕩シナケレバナラナイト云フ



様ノ意見ヲ有ツキ至ツタ次第デアリマス、然ル所十一月末第二  
次天津事變ニ際シ在支天津軍ヨリ兵力派兵ノ要求ガア  
ツタノデ當時馬占山軍主力西復滅後デハアリ對シ刺激ヲ  
セザル根本方針ニモ鑑ミ此方面ヲ減兵シテモ錦州方面ニ  
兵ヲ進メントシテ準備ヲシマシタガ却ツテ中央統帥部ハ  
之ヲ抑止シテ来マシタ、當時支那外交ヲ當局ヲ通シテ  
我外務筋ニ錦州附近中立地帯設定問題等ガ提議セ  
ラレテ居ツタ様デアリマスガ我方ガ兵ヲ引キマスト忽チ支  
那側ガ此提議ヲ引込メテシマウト云フ様ナ状態デアリ  
マス、兵力過少ニシテ軍事的形勢ガ極メテ不安ノ位置ニ  
在ル出先部隊トシテハ機先ヲ制シテ所在ノ敵ノ反抗ノ  
萌芽ヲ叩ク必要ガアツタハゴアリス、其ノ詳細ハ



關東軍司令官本庄將軍ハ温厚ナル人格ニ拘ラズ常ニ大局  
ヲ判断セラレテ少壯幕僚ノ積極的意見ニ就テモ十分之ヲ  
傾聴スルト共ニ<sup>間</sup>關外ノ重責ヲ一身ニ擔ヒ自ラ確固タル決  
意ヲ以テ命令ヲ發シ大綱ニ關シ指示ヲ與ハラレマシタ  
關東軍ハ軍ノ意見トシテ屢々積極的ニ具申シ時ニ中  
央部ト激シイ論争ヲスルコトモ屢々アツタリテアリマスガ尤  
極ニ於テ軍ノ統帥作戰ニ關シ奉勅命令ニ背馳シ若クハ  
奉勅指示ニ違反シタコトハ一回モナカッタコトヲ断言致シ  
マス



其ノ一ツハ奉天事件突発ニ伴フ關東軍主力ノ出動デア  
リマス、併シ之ハ前申シタ通り當時ノ軍事的情勢  
カラ觀テ不在將軍が關東軍司令部條令第三條並ニ  
平時ノ作戰準備ニ基イテ其ノ有スル任務權限ヲ發動  
セラレタモノデアリマス

モウ一ツハ十月八日錦州方面ノ爆撃デアリマスガ之ハ當時錦  
州方面ニ占據シテオク東北軍ノ狀況ヲ偵察スル為ニ八  
式偵察機六機押収ホテノキ五機ヲ以テ該地附近ヲ偵  
察セシメマシタ所應射ヲ受テタノデ自衛上其ノ軍政權  
廳告テアル交通大學及ニ八師ノ兵營並張作相ノ私邸  
等ニ約七五発ノ爆彈ヲ投下シタニ過ギマセン所ガ此爆  
彈ハ七種級山砲位ノ大キサデアリマシタガ完全ニ投彈裝置



ガナク手デ投ゲタ様ナ塩梅デ多少彈丸ガ他ニ散ツタカモシレ  
マセンガ併シ之ヲ前歐洲大戰ニ於テ獨六軍ガ行ツタロンドン  
爆撃手或ハ今次戰ニ於ケル米軍「Bニ九」等ノ日本都市爆  
撃手トカ、廣島、長崎ニ於ケル原子爆彈投下ノ慘害ニ比  
シタナラバ殆ンド問題ニナラナイ程デアツタト確信致シマ  
ス其他ノ場合ニ於テハ何レモガ中央トヨク意見ヲ戰ハシ若  
クハ其ノ指示ヲ俟ツテ作戰ヲ開始セラレタ次第デアリマス  
殊ニ北端方面ニ對スル用兵ニ關シテハ中央ノ方針ニ則ツ  
テ對蘇關係ノ全般ニ考慮ヲ加ヘ蘇國ニ對シテ我方ノ  
侵略的疑念ヲ抱カセタリ又北端ニ於ケル彼ノ權益ヲ侵  
スト云フ様ナツトソナイ為ニ作戰ノ不利不便ヲ忍ンデモ部  
隊ノ行動ヲ拘束シタ次第デアリマス



第六、滿洲問題解決に軍事の見解ニ就テ

當時、日支間ノ状態ハ亦所具ニ於テ支那側ノ國權回復ト  
我方ノ權益維持トノ相交スル要求ノ衝突デ何レカ一方讓歩  
スルカ双者妥協セサル限リ解決ハ至難ト認メラレマシタ。從  
ツテ單ナル外交交渉ニヨツテ日本權益ノ保持ハ到底期シ  
難ク眞ニ我邦人ノ滿洲ニ於ケル平和的經濟活動ヲ行フ  
為ニハ理論的ニハ先方ガ妥協セサル限リ滿洲ニ於テ從前  
我方ノ有スル政治經濟軍事諸般ニ亘ル特殊權益ヲ  
全部放棄シテ之ヲ解決スル以外ニ方途ハナカッタ思ヒ  
マス、併シ乍ラ當時、昭和六年一月ニ於ケル幣原外相演  
説或ハ同年四月若槻總理ノ地方演説ニモ見ラレル如ク我  
ガ政府、滿蒙ニ期スル所ハ又斯ノ如キ徹底セル方策ヲ斷



行シ得ナイノミナラズ我國論ハ之ヲ許シマセンデシタ。又實際問題  
トシテハ日本ガ万一滿洲ヨリ全面的ニ退却シタナラバ單ニ我權益  
ヲ失ヒ且在滿邦人ヲ死、閉頭ニ追ヒ込ンダ許リデナク當時既  
ニ蘇支紛争ニ於テモ認メラレタ如ク漸ク極東ニ復活シ来レル  
蘇聯ノ滿洲進出トナリ其ノ傳統ノ政策ニ鑑ミマシテ若シ滿  
洲ニ蘇聯ガ進出シ赤化ノ策源トナリマシタナラバ滿洲ノ治安  
ノ確立ヲ得サルノミナラズ日本自体ガ其ノ國防ヲ全ウレ得ズ  
支那亦國防上重大ナル關頭ニ起ツモノト謂ハサルヲ得マセンテ  
シタ

之ヲ日清戰役後ノ狀態竝ニ日露戰爭ノ原因ニ見ルモ明カテ  
アリ殊ニ日露戰爭ニ於テ米英ガ我ヲ支持シタ所以モ亦  
露國ノ極東侵略ヲ抑止セントスルニ存シタモノト謂ヘマセウ



從ツテ當時ノ關東軍トシテハ我外交方策ニ要ボラシ又ハ之ヲ云  
マスルトイフコトニツイテハ關係ハナカッタノデアリマスガ事變動  
發東北支那軍崩壞ニ直面シマシテ新ナル事態收拾ニ際  
シテ治安確立、滿洲防衛態勢ノ確立ト云フ点ニハ重大ナ  
ル關心ヲ持ツタ次第デアリマス、殊ニ新事態ニ對處シテ  
對蘇防衛態勢ノ確立ガ軍事的ニ觀テ有利デアルト  
云フコトハ關東軍トシテ關東軍司令官トシテ十分ニ考  
慮セザルヲ得ナカッタ所デアリマス  
併シテ勿論對ソ防衛ノ確立デアツテ之ヲ基地トシテ對ソ  
攻勢ヲ企圖スルト云フコトハナカッタノデアリマス、換言  
スレバ滿洲ノ有利ナル戰略的體態ヲ活用シテ日支共  
同ノ聯ノ南下ヲ断念サス又外交交渉ニ無限ノ支援ヲ與



ヘントスルニ外ナラナカツタノデアリマス、滿洲建國ハ右軍事的の見  
解トハ別個ニ東北新政治革命ノ所産トシテ東北軍閥崩壊  
ノ後ニ創建セラレタモノデアリマス、我軍事行動ハ契機トハナリマシ  
タガ断ジテ建國ヲ目的トシ若クハ之ヲ手段トシテ行ツタモ  
ノデナカツタノデアリマス、又事變解決ニ當リ滿洲ガ支那カ  
ラ分離スルト云フコトハ誠ニ情ニ於テ忍ビ得ナイ所デアリマ  
シタガ東亞安定ノ為ニハ寧ロ滿洲ニ於ケル諸民族ノ趨向ナ  
リ活動提推乃ヲ察知シテ多年ニ亘ル紛争ノ禍根ヲ解決ス  
ルト云フコト即ケ民族協和ニ依ツテ各民族ノ共榮ヲ策スル  
ト云フコトガ軍事的ニモ戦争ヲ終息セシメ究極日支提推乃  
ニナルモノト考感セラレマシタ、關東軍ハ從ツテ此軍事的見解ニ  
基キ速ナル治安ノ確立ニ專念シ占領地行政モ行フコトナシ



現地官民ニヨル新ナル事態ノ收拾ヲ待望シマシタ。  
新國家政治經濟等ノ内容ニハ大ナル關心ハアリマセンデシタ  
併シ在任諸族ノ民族協和ニヨル紛争ノ除去ト日支共榮ノ  
為ニハ日本自体先ツ模範ヲ示シ權益思想ヲ去リ道義  
的ニ新ナル構想ヲ以テ滿洲ノ安定ニ寄與スベキデアルトノ  
信念ニ基キ特ニ將兵ノ行動ニ自肅自戒ヲ加ヘタ次第  
デアリマス。建國ガウマクユキマシタ為後ニ至リ手柄顔  
ニ建國ハ権ガヤツタトカ關東軍トモ通謀シテ計畫シ  
タトカ軍官民ノ心ナキ徒輩ガ色々ト申シマシタガ、滿  
洲建國自体ハ全ク滿洲ニ於ケル歴史の所産デアリ  
マス民族協和ノ思想ハ今後モ永ク殘ルコトト確  
信致シマヌ。



昭和二十二年(一九四七年)一月十六日於山形縣

供述者

石原愛甫



右ハ當立會人ノ面前ニテ宣誓シ且ツ署名捺印シタルコトヲ證

明シマス

同日

於

同所

立會人

山田半藏

